

LPガスは“持ち運べるインフラ”

災害時に生きる可搬性の強み

自然災害が多い日本では近年、巨大地震だけでなく、毎年のように台風や豪雨による水害が発生し、暮らしに大きな影響を与えています。7月30日にもカムチャツカ半島付近を震源とする巨大地震が発生しました。日本列島の広い範囲で津波警報・注意報が発令され、多くの住民が避難したのは記憶に新しいところです。

災害時に電気や都市ガスのライフラインが寸断したとき、生活を支えるエネルギーとなるのがLPガスです。LPガスが持つ特長の一つが、「持ち運べるインフラ」とも言える可搬性です。

LPガスは容器で運ぶ分散型の供給方式で、電気や都市ガスのようにネットワークに依存しないエネルギーです。

全国に安定供給網が整備され、災害発生時に必要な場所にLPガス容器を運ぶことができます。避難所や仮設住宅などにもすぐに届き、LPガスを使えます。

避難所にLPガスがある安心感

いつどこで発生するかわからない災害に備えるために、どこにでも運べるLPガスの存在は大きな安心となります。

万が一、避難所生活を余儀なくされた場合でも、LPガスで「温かい食事がとれる」「お湯が使える」「寒さをしのげる」ことは、被災者に安心感を与えてくれます。

炊き出しや給湯、暖房だけでなく、LPガスを燃料にした非常用発電機や空調設備（電源自立型GHPエアコン）があれば、さらに安心感は高まります。

停電で照明や通信が使えなくなった時でも、電源を確保でき、電気製品の使用やスマートフォンの充電ができるだけでなく、猛暑の夏や寒い冬でもGHP空調を稼働させて、避難生活中的健康維持の心配を緩和することができます。

政府も公立小中学校体育館等の避難所となる施設の防災機能強化の一環として、発電機やGHP等の設置を推進しています。



全国津々浦々に届く重要なエネルギー

また、山間部や島しょ部で暮らす人々にとって、「持ち運べるインフラ」であるLPガスは、日常生活を支える重要なエネルギーです。

容器を担いで山道を歩く、フェリーで運搬するなど、持ち運べるインフラの強みを生かして、全国津々浦々に届けられています。

LPガスは平時も非常時も地域住民の暮らしを支える大切なエネルギーなのです。

LPガス
人と地球にスマイルを

日本LPガス団体協議会

